震災復興期に至る公園設計の史的展開について

小 野 良 平*

The Historical Developments of Park Design in Japan
(Middle Meiji—Early Showa)

Ryohei ONO

摘要：市区改正に始まる近代都市公園整備が、帝都復興事業を経て一つの結実を見るまで、その間の公園設計の史的展開は不明な点が多い。主に東京の都市公園を対象に新設公園の現れた明治中期から復興事業の完了した昭和初期に亘る公園設計の源流を辿ることにより、近代化の中で公共造園設計が、西欧から何を学び如何なる系譜の下に展開してきたのかを明らかにすることを試みた。

1. はじめに

1923年の関東大震災に伴う帝都復興事業の中で整備された所謂震災復興公園は、その極めて系統的な公園計画や斬新な意匠によって、わが国の公園史の中で重要な一つの時代を画していることは既に定説となっている。特に近年の各界のポストモダンの潮流とそれを逆照射する形でモダニズム再考の気運の中で、この震災復興公園もしばしば再評価されている¹⁾。確かに震災復興公園は、特にそのデザイン面に於て画期的なものとして市民の前に登場した訳であるが、それが「モダン」なる、大正或は1920年代という時代の「気分」と共に語られる事で済まされ、反面造園界内部からの史的考察を欠いたまま、復興の街に突如現れたかの如き印象を与えられていることは否めない。

わが国の公共造園史は明治6年の太政官布達により制度として出発し、その後東京においては明治21年以降の市区改正によって都市計画に組込まれた公園計画が始まり、明治神宮造営事業による学問的基盤整備、人材育成期を経て震災復興公園に一つの結実を見た概括することができる。しかしその設計、営造物としてのフィジカルなデザインという側面から見た場合、その史的展開は余り明らかでない。明治以降の公共造園史に関しては、既に多くのまとまった記録及び研究がある²⁾。そのうち公共造園設計史に関しては佐藤³⁾が通論をまとめているが、これは既往の記録の集成にとどまっている。また白幡は、横浜公園⁴⁾、日比谷公園⁵⁾等歴史的意義の高い公園の設計を詳細に研究しているが、公園設計史の大きな流れは見えにくい。或は復興公園自身についても、大公園のアメリカ、小公園のドイツ、各々からの影響の指

摘⁶⁾はあるが、そのような短期的な視野でなく、もう少し遠く遡って長い眼でみた場合、その底に何か流れていたものはなかったのか。幸か不幸か直面した復興という内的要請が飛躍的にこの時期の公園設計を進めたことは確かであろうが、それ以前の黎明期の公共造園からの継承はなかったのか。本稿はこのような問題意識にたって、震災復興公園をわが国の公共造園史上のひとつのマイルストーンとして見据え、それが如何なる源流の下に西欧から何を学び、如何なる系譜を辿って到達し得たのかを少しでも明らかにすることを試みた。対象としたのは、主に東京で行われた公共的造園事業にとどめた。そして計画者、設計者の系譜に特に注目し、彼らの足跡を追いつながり公園設計の系図を作ることを試みた。より具体的には国執行の3大公園（東京）を統括した折下吉延（1881-1966）と東京市執行の52小公園の井下清（1884-1973）の二人と彼らに影響を与えた人物に着目した。その結果、明治以来の公共造園設計はこの大公園、小公園に対応する形の二つの柱で展開されてきた事が分かった。以下この構成で論を進めるが、もちろん、その全貌を明らかにすることは不可能であり、本稿ではいくつかのモチーフに焦点を絞った。即ち大公園の系譜ではヴィスタによる景観構成に、小公園の系譜では広場の構成手法に各々注目した。なお誌面の都合上、多くの図面や資料、年表等の提示を割愛せざるを得ないことを了承頂きたい。

2. ヴィスタ思想の系譜と大公園設計

本研究の出発点となったのは震災復興大公園の一つ、浜町公園（1929、昭和4年開園）の平面計画（図1）である。中でも公園正面に取り付けられた4列並木の公園

*（株）日建設計

図-1 浜町公園平面図
(東京都緑の図書室所有)

道路の存在は興味深い。これはもちろん、復興局公園課長折下吉延が盛んに説いていたブルバールシステム⁷⁾への公園側からの対応例として設計されたものであろうが、もう一つの意図は並木道によるヴィスタ景観の創出であろう。このヴィスタは視方向を限定する並木や建築群と、その視線を受け止めるアイストップで成り立つが、従ってある敷地内でそれを完結させるためには広大な敷地を要する。3 ha程の浜町公園にこのヴィスタの荷は重すぎると思える。実は、この浜町公園のヴィスタは折下がその直前に明治神宮造営局で手掛けた明治神宮外苑(1926, 大正15年竣工, 図2)の景観構成の焼き直しであると考えられる。並木道とその前方に広がる芝生広場、アイストップの建築物、そして並木道と広場の結節点の噴水等構成はそのままに、スケールだけ縮小したものが浜町公園といえる。ではその神宮外苑のヴィスタには祖型があるのだろうか。そこで折下の来歴を辿って

図-2 神宮外苑(大体計画図)
(明治神宮外苑造営誌より)

みると、彼は大卒後、新宿御苑(1906, 明治39年改造工事竣工)においてわが国園芸学の祖、福羽逸人(1856-1921)の下で働いている(1908-1912)⁸⁾。福羽は、高橋⁹⁾も指摘する通り、Henri Martin¹⁰⁾による新宿御苑の改造設計(1900年福羽がパリ博時に依頼)に接し(正門付近にフランス風のヴィスタ構成が見られる)、第5回内国勲業博覧会(1903, 明治36年, 図3)の会場設計で初めて導入された並木の手法に関与した人物である。浜町公園の並木道の源流はこの辺りにあったと云えよう。高橋⁹⁾はこの会場形式に著しい西欧の影響の支配を認めながらも、アイストップの欠如などに技術の未洗練、未熟を指摘している。それではこの第5回博覧会の設計は、単なる並木道として計画されたのか、或はヴィスタとい

う景観構成が意図されたものだったのだろうか。検討を加えてみたい。

第5回博覧会では、過去5回の内国勲業博覧会で初めて敷地計画の経緯が記録されている。建物配置と大通りの計画に関しては、「……東南端ニハ地勢頗ル高キヲ以テ低キヨリ高キニ向ヒテ建物ヲ配置スルノ計画ヲ立テタリ又比敷地ノ略方形ナルヲ以テ中央ノ大通路ヲ対角線ニ設ケテ成ルヘクソノ距離ヲ延長セシメ而シテ其左右ニ各館ヲ配置スルコトトセリ」¹⁰⁾と、東南端の丘、即ち突出した敷地部分に焦点が据えられていることが判

図-3 第5回内国勲業博覧会平面図(文献10)より)

る。そして大通路の先には美術館が計画されるが、これに関しての記述は以下の通りである。「美術館ハ元来大通ノ正面ニ真直ニ建設スルヲ良トシタルモ……民有地ヲ使用セサルヘカラサル……難工事ヲ生スルト共ニ自然經費ニモ影響スルヲ以テ多少ノ不利ヲ棄テ、其位置ヲ丘上ノ中央ニ定メタルナリ」実は、美術館がアイストップとして考えられていたのである。ヴィスタという景観構成の認識はこの時期に確かにあったといえる。ところでそれが実現しなかった理由は地権、施工技術、経費等の問題であるらしいが、これをやや異なった視点から考えてみたい。

内国勸業博覧会は明治政府が殖産興業への活性化として、第1回(1877)から第3回(1890)までを東京の上野公園で、第4回(1895)は京都で各々開催してきた。上野の会場計画は、ほぼ現在の上野公園の構造に近く、最奥の博物館目指してメインストリートが通る明快な軸構成である。この一見ヴィスタを想わせるこの軸構成は、機能的には天皇の馬車による行幸道路としての要請に従ったものといえるが、しかし景観的には維新戦争で焼野となった筈の寛永寺の伽藍配置に強く規定されている。塀に囲まれた本坊跡に美術館(博物館)と天皇の列席する式場が整備され、その外側前面にパビリオンが立ち並ぶという(第2, 3回)、重畳性に根差した所謂「奥」へと入込む空間なのである。本稿はこの分析を直接の目的とはしないが、美術館と式場がセットになって最奥に座するのは第4回の会場計画でも同様である。そして第5回でもこの構成は残っている。つまり、東南の丘(最奥)に目標(即ち美術館と式場の位置)がまず設定されたが、その次は突出敷地内における美術館と式場の関係が優先され、結果アイストップとしての美術館は斜めを向いてしまったとは云えないだろうか。ヴィスタという西欧的景観構成と日本の伝統的な空間形式が出会い、奇妙に交錯していたのが第5回内国勸業博覧会であったと云える。

但し、福羽自身がヴィスタをどの程度認識していたかは判らない。彼は並木を含む庭園部門の担当ではあったが、敷地の全体計画者や、福羽の全体計画への参与度等は不明である。また彼の園芸学の講義¹¹⁾では並木に関してはバリを例にその偉観荘厳さを強調しているものの、建物との関係には言及していない。更に宮内省内匠寮技師、新宿御苑掛長としては、Martinéの設計には見られるアイストップとなるべき宮殿の実施計画を後廻しにして¹²⁾、結局新宿御苑にもヴィスタ景を完成できなかった。内国博と御苑という日本へのヴィスタ初導入の現場に確かに福羽はいたが、彼はそこに偉観荘厳の並木以上のものは見ていなかったようである。

未完に終わった明治のヴィスタは、奇しくも明治を記念する神宮の外苑に於て折下によって実現された。外苑計画の発案者には異説¹³⁾もあるが、人とヴィスタの系譜か

ら考えると、やはり折下の設計であろう。彼は1915年、榎原神宮の拡張整備事業に参画しているが、ここで参道の付替計画を行っている。それは社殿まで直進する参道を途中一度屈折させる計画¹⁴⁾であった。それは明治神宮内苑の設計によく活かされている。彼にはある景観構成を模式的にユニットとして捉え、それを個々に適用していくという設計ができたのだろう。しかし同様にしてヴィスタを浜町公園に適用したところに落穴があった。

博覧会から神宮まで、福羽一折下の辿ってきた道は、全て国家(記念)事業としての造園であった。震災復興で「公園」を手掛けるのは折下にとっては初体験だった。確かに明治神宮外苑は準公園という性格が付与されていたが、明治天皇を記念する外苑に求められるものと、浜町公園のそれと同じであるはずはない。一般的な公園への、記念性・象徴性表現の代表格であるヴィスタの適否も然ることながら、とにかくスケールの浜町公園にはヴィスタは不適であった。アイストップとしての記念塔は敷地との関係上小さなものとなっており、ヴィスタを旨く締めくくれていない。浜町公園はビジネス街の近隣公園として計画され、更に河岸にあった水練場¹⁵⁾という場の記憶を活かしてプールを導入するなど、利用面の考慮もあったのだが、景観づくりに於て不用意にヴィスタを持ち込んでしまったようである。折下がPublicな造園を学んだのは都市計画法制定に合わせて派遣された欧米8カ国の視察(1919)によるものが大きい。実際他の復興公園については、レクリエーションセンターとしての錦糸公園や臨水公園としての隅田、山下公園等、欧米視察から折下が得た知識¹⁷⁾を実現させたものと言える。

3. 小公園設計の源流と系譜

1889(明治22)年の市区改正旧設計では49の公園が決定されたが、このうち社寺公園を除いて新設されたものは日比谷公園(1903開園)と坂本町公園(1889開設)の二つのみである。都市公園の先駆をなした日比谷公園については既に検討が重ねられているが、一方の坂本町公園については原設計等不明な点が多い。設計者は東京府土木掛、長岡安平(1842-1925)であることが知られているが、この当初のプランとしては、1897年12月号の『風俗画報』の記述と絵をもって語られることが多い。それによれば、1784坪の、平坦地もあるが桜、梅、柳等を配し築山風の盛土も見られ、四阿の他茶店もある和風色の濃い公園であるようだ。しかし開設当初の面積は約900坪で、1894年頃追加されている¹⁶⁾他、意匠的にも画報のものとは異なることが判った。1889年、東京市会は市区改正公園10ヶ所について調査を行い改良案を練る臨時公園改良調査委員会を設け、1891年に報告を行っている¹⁷⁾。坂本町公園の報告は次の通りである。「坂本町公園ハ地形狭小ニシテ、充分ノ庭苑ヲ築造スルノ余地ナキ

図-4 御茶之水公園（委員会案、文献20）より

ヲ以テ、全体ヲ植込トシ、之ニ橡樹ヲ植栽シ、中央ニ橢円形ノ空地ヲ存シ、一ノ小亭ヲ建設シ、東北二方ハ鉄柵ヲ繞シ、門三ヶ所ヲ設ケ、下水及雨水吐ニ陶管ヲ埋布シ、瓦斯街灯六基、鉄製長椅子五脚、捨石凡十五箇ヲ装置シ、以テ小公園トス。以上結了。一、橡樹植栽ノ事。一、上水改良ノ上ハ噴水ヲ設ル事¹⁸⁾。」以上結了までが現況、その後が改良案であろう。樹種は橡のみ、桜梅柳や茶店はどこにもない。1889年の長岡の設計はこれに近いものではないか。基本的には中央の橢円形の空地とそれを取り囲む植込込み、そしてその中に高木として橡が植栽されているという、緑に囲まれた単純な広場である。当時公園といえば上野等の大面積の社寺しかなかった時代にあって、天保生まれの造庭家長岡は、僅か900坪の土地に従来の庭園ではない「公園」なるものを設計するに当たり、その公園の概念にこだわらざるを得なかったのではないだろうか。それは桜の名所ではなく、市区改正審査会の唱えた「都市の肺臓」たる機能としての空地＝広場と、庭の美としての緑、という素朴な設計であったといえる。彼は公園のエッセンスをこの900坪に盛り込もうとしたのではないか。長岡は年代不詳ながら、公園設計論として、「……第一に多人数を入れ得べき広場を有する事、第二に児童の遊戯場を備へることは必要条件である」¹⁹⁾と述べているが、この広場志向は既に坂本町公園から始まっている。それが1897年には花の名所になっていたのは何故か。一つには、初めて眼にする「公園」

に利用者が勝手に桜を植え旧来の名所化したことが考えられるが、本稿では仮説に留めておく。尚この中央広場と周囲の植込みの構成は、規模が異なるが横浜公園（1876）の地割⁴⁾や、後の日比谷公園の東京市案（1893）⁵⁾にも通じ、白幡⁵⁾はこの両者間の類似性を指摘している。東京市案については長岡関与の可能性も否定できないが、これに長岡の坂本町公園が結び付くかどうかは今回検証できなかった。

その後の東京市の公園事業は日比谷公園に総力がつき込まれたが、続く1908（明治41）年東京市が設置した公園改良設計委員会の意義はこれまで殆ど顧みられていない。これは本多静六以下5人の学者、市会議員らが11公

園（芝、浅草等）の改良設計と3公園（お茶の水、緑町、下谷）の新設設計を行ったものである。1910年に報告書²⁰⁾が提出され、その冒頭で本多が全体方針を説明している。それはいきなり造庭様式の説明から始まる。まず大きく幾何学式と自然式とに大別した上で、世界の様式の大勢と変遷として、あらびあ式、羅馬式、英国式、近世式（又は折衷式）等の解説を行い、我々もその折衷式に更に日本式を取り入れた折衷式を採用するという結論である。西欧造園史への造詣の深さを窺わせるが、実はこれはベルリン市の造園局長、Gustav Meyerの著書、“Lehrbuch der Schönen-Gartenkunst”（Berlin, 1895）の一部抄訳であった。Meyerは俗に云うLenrè=Meyer学派の19世紀後半ドイツ公共造園界の指導的立場にあった人物である。Meyerのこの造園書は、ドイツにおける本格的な造園教科書の走りだった²¹⁾。さて実際の設計の方は、改良案は実行されたかどうか不明であるものの、新設設計の内、御茶之水公園（図4）は委員会案がほぼ実現した（1912開園）。この平面を見ると、広場と、それに分離させて設けた児童遊戯場という、長岡の坂本町公園や彼の設計論を継承した設計であることが判る。一方広場に列植された樹木のモチーフは大正年間に多数造られた市区改正公園（虎ノ門、数寄屋橋公園等）を経て、震災復興公園やその後の戦前の都市計画公園の全てに現れる。公園改良設計委員会の設計は坂本町公園から震災復興公園までをつなぐ重要な位置を占めていることが判った。更に興味深いことに、この委員会に東京市に入職間もない井下清が作業スタッフとして係わっていた²²⁾。井下は当初長岡の指導の下にあったから、戦前の東京市の公園は全て長岡－井下の産みだしたものと云えることになる。

ところでこの列樹のモチーフは本当に委員会の独創だったのかというとそうではない。実現はしなかった緑町公

図-5 緑町公園（左）とハンペル図集より（スケール加筆）

さて震災復興小公園は井下自身の発言によって彼の外遊や北ドイツの住宅地の小公園との関係で捉えられることが多いが、一方で広場構成等、坂本町公園以来の流れに沿ったものであることも判った。井下の云うドイツの影響は、昭和3～5年頃開園されたものによく表れている。それは52小公園の中でもかなり装飾性が強く、レベル差を積極的につけた立体性のある公園が多い。しかし昭和6年に開園した後期のものはかなりシンプルな構成をとるようになる。それは井下がこの頃からし始めた「叱り、叱られることのない」²⁵⁾という利用面重視の姿勢を反映したものと言える。

以上の検討を元に、試みに公園設計の系図を作成してみると図6のようになる。大公園設計の流れにおいては、その国家事業的出自ゆえ、様式美、景観構成等の面において西洋式の設計が早くから展開された。その反面、「公共」造園には大正期に入って初めて直面し、復興大公園は外国モデルの移入が主体となり、自ら育んできた手法（ヴィスタ構成等）と公園との適合性への配慮に不十分な点がみられた。一方小公園の系譜を見ると、市区改正という初めての都市計画の中にあって、当初より「公園」へのこだわりはあったと思われる。装飾性において外国の影響を強く受けながらも、広場を中心に据えた構成という根幹は動いていない。両者何れにも共通していたのは、「近代化」の中で西欧の手法を学ぶ過程で、その様式手法を設計思想として把握するまでには至らなかったことである。

[illegible]

— 77 —

のシンプルな坂本町公園が、明治30（1897）年には桜の名所に変貌していたということはその証拠であろう。即ち長岡は外的要請のみによってまだ見ぬ公園というものを設計しなければならなかった。

このような中で外国造園図書が入ってくればそこにある図面に飛びつくのは当然である。それはまさに西欧のアイコンだったのだから。日本には空間を記述する平面図はあっても、少なくとも造庭家には平面図で空間を構想する技術はなかった。日本庭園は、これを紙面に描くとすれば、「景」を描くことで構想されてきた。建築の場合には明治初期、外国人教師の指導の下に図面のみではなく、その技術全体が持ち込まれたわけであるが、造園に外人教師はいなかった。唯 TEXT のみが船で運ばれてきたのである。従ってこの平面図が単なる図像として扱われたことは仕方のないことであったともいえる。即ち本多静六はベルトラムの造園図集の中から数点を、そのスケールなどは全く考慮せずに、カラーージュして日比谷公園を設計した。公園改良設計委員会の緑町公園案も同様であろう。日比谷公園は、とにかく近代的な公園を、という要請の中、幾度も設計案が反故にされてきた末の本多の設計であったが、本多案はその空間構成ではなく、近代の図像としての図面が東京市会を満足させただけのことである。このとき以来、まだ技術としては未消化のままに取り入れた平面図的な思考法がその後の造園設計に何をもたらしたかはまだ熟慮の余地があるが、例えば、利用システム面の欠如や、或は紙上のゾーニングに固着した設計のあり方など様々あるのではないだろうか。

日比谷公園設計に際して日本庭園部を本多に依頼され、平面図ならぬ伝統的な景色図を以って設計図を提出した明治の異色庭園史家、酔園・小沢圭次郎は、このような設計のあり方に反旗を翻し、警鐘を鳴らした最初で最後の人間であったといえる。彼が「設計」の文字を用いず「設景」と表記したことは象徴的である。

謝辞：本稿の基礎となった研究に際しては、東京大学の篠原修、堀繁、下村彰男各先生の多大な指導を戴きました。深く感謝致します。

参考文献及び補注

- 1) 例えば、陣内秀信：東京の空間人類学：筑摩書房 1985
- 2) 例えば、前嶋康彦：東京の公園110年：東京都 1985
- 3) 佐藤昌：日本公園緑地発達史上：都市計画研究所

1977

- 4) 白幡洋三郎：造園の洋魂和才、横浜公園造成の経緯：京都大学演習林報告53号、p 216-230, 1981
- 5) 白幡：近代化のなかの「公園」、日比谷公園の誕生と海外情報：京大大学人文学報53号、p 213-290, 1982
- 6) 前嶋：関東大震災と東京の公園：都市公園83号、p 23-42, 1983
- 7) 都市計画講習録全集 下巻、pp 52, 1922
- 8) 折下先生記念事業会：折下吉延先生業績録、p 15, 1967
- 9) 高橋理喜男：公園の開発に及ぼした博覧会の影響：造園雑誌 30（1）、p 12-24, 1966
- 10) 第5回内国勸業博覧会事務報告、p 97-98, 1903
- 11) 日本公園緑地協会：福羽逸人述園芸論、この中の造庭論は Édouard André : L'Art de Jardin : 1879の抄訳である。
- 12) 中島卯三郎：新宿御苑：庭園と風景15（3）、p 2-4, 1933
- 13) 井下先生記念事業委員会：井下清先生業績録：1974
- 14) 田阪美徳：官弊大社権原神宮境域拡張整備史：公園緑地 5（1）、p 8-15, 1941
- 15) 江戸東京学事典、三省堂、「水練場」の項
- 16) 東京市役所：東京市史稿・遊園篇第6巻、p 637-638
- 17) 1891年の報告は、公園改良取調委員の名称で行われており、1889年設置の臨時公園改良調査委員と異なっている。
- 18) 東京市役所：東京市史稿・遊園篇第7巻、p 86
- 19) 井下清篇：祖庭・長岡安平翁造庭遺稿、p 31, 1926
- 20) 東京市公園改良設計調査報告書：東京市：1910
- 21) 白幡：グスタフ・マイヤーとドイツ19世紀中葉の造園界：造園雑誌47（5）、p 13-18, 1984
- 22) 井下は1908-10年に公園改良の件で特別報酬を得ている。¹³⁾
- 23) 桜井長雄：東大卒論「東京市公園研究」：1920、なお桜井の調査により大正期の市区改正公園殆ど全てに広場内に樹木が列植されていたことが判明した。
- 24) 佐藤昌：日本公園緑地発達史上：都市計画研究所 p 564
- 25) 井下清：都市公園設計上の一考察：造園雑誌1（3）、p 163-170, 1934

Summary : The Author revealed historical developments of park design in Japan from the middle of Meiji to the early Showa, when Tokyo had been reconstructed after the Earthquake. There had been two lines of park design, one had developed among the national projects, and the other among the city planning. And the origin of some important design methods which were derived from the West was made clear.